

## 近代浄土宗の社会事業と演劇

—『浄土教報』掲載記事を中心に—

齊藤利彦

## 〔抄録〕

近年の近代演劇研究における潮流のひとつに、演劇雑誌類の考察があげられる。『演芸画報』や『幕間』など、専門雑誌類の編集方針・傾向、主宰者・編集者、掲載の芸談・芸論などが考察され、これまでにない知見の発見が相次いでいる。では、宗門系の雑誌類からは、どのような演劇関係記事を抽出することができるのであろうか。

本稿は近代浄土宗の公論的機関紙である『浄土教報』などに掲載された演劇関係記事を中心に、近代浄土宗と演劇・演芸との相関関係を考察することを目的とする。その際、慈善事業と演劇関

係記事を取り上げ検討してみたい。というのも、近代浄土宗は戦前の一時期、「社会事業宗」と称されるほど、社会事業に力を入れ、社会に貢献した宗派であった。そのため、さまざまな慈善事業・救済事業、社会事業を展開するが、そういった事業実施の際、演劇・演芸が「慈善公演」というかたちで実施されることが多かったからである。

キーワード 浄土宗、社会事業、慈善公演、歌舞伎、『浄土教報』

## はじめに

昭和一〇年（一九三五）四月、浄土宗僧侶有志によって設立された任意団体〈法然上人鑽仰会〉は、翌月から月刊機関雑誌『浄土』を刊

行する<sup>〔1〕</sup>。現在、同会のホームページでバックナンバー検索が可能であり、検索をかけてみると、幾人かの歌舞伎役者が「〇〇談義」という欄で随筆を寄稿していることが確認できる。

たとえば、昭和十一年（一九三六）五月号「芸道談義」欄に、初代

中村吉右衛門が「修行第一」と題する、つぎのような随筆を寄せている。長文となるが掲出してみたい。

## 【史料1】

私はいさゝか弓をやります。この数年間やつてをりますが、自分では、これによつて可成り得るところがあつた様に考へます。と云ひますのは、結局する処、これも一つの道でありまして、単に肉体の錬磨、精神の修養と云ふ以外に、私の役者として修業、芸道と云ふこと、大変共通したところのあるのを感じるからであります。

役者は一生の修業でありまして、芸を磨くためには日常不断の稽古が一番大切であります。舞台の芸術を磨くためには芝居の稽古が大切であるのは云ふまでもありませんが日常の稽古事は更に一層大切であります。これは舞台の上で實を結ぶ芸の基礎ですから、これが確り出来てゐるかどうかが最後を決定するものであると考へます。

弓も俗に『巻藁三年』と云つて、初めからの向はせないで、先づ巻藁で稽古させる程大切にしたものです。的を射るやうになつて弓を取つて、あしづみ、どうざり、うちおこし、ひきとり、かい、はなれ、かう云ふ順序に確り固めておきまして、さてはなれへ来て矢は放たれる。此処へ来ればもう唯我独尊の境地です。そこまで確かめてきたもの、成果がこゝに集中し、此処に現はれて来る訳であります。

芝居にしてもこれと同じやうなことが云われるかと思ひます。役者が揚幕から一步踏み出したら、もう矢が弓を離れたのと同じであつて、稽古も何もありません。日常不断の心掛けがこゝに現はれて来るのでありますから、大胆に十分な余裕を持つてやれなければ的を外れた弓と同じやうなものです。ですから、役者も舞台へ出る前後の用意が最も大切なのであります。幕のあく前に仲々気を許して洒落や冗談などを云つてはおられない、弓で云へばはなれへ車での心の構へと同じであります。

矢が的に当らなかつたからと云つて、的ばかり覗つてゐたのはだめなのです。弓は的へ当てやうとしてはいけない。自分の欠陥は先きに述べたやうに切つてじゃなす迄の一つながりの基本的な姿勢にあるのですから、それを直すと云ふことに気が付かなくはならない、つまり不断の稽古の要点はそこになければならない訳であります、唯的に当たりさへすれば良いと云ふ考へは邪道であつて、これでは本当の上達は望めないし、道に達することは出来ません。

役者も賞められやう、受けさせやうとばかりあせるのは、結局的ばかり覗つて何時もはずれてゐる弓のやうなものではないかと思ひます。

結局、弓にしても唯的を覗ふものではない、確りした稽古を積んでそれだけの心構へを造つて置くと云ふことによつて始めて本当に的に当てる事が出来ると私は考へるのであります。

初代吉右衛門が弓術を嗜んでいたのは知られているが、弓術に絡めつつ、自らの芸に対する心構えを述べている。<sup>(2)</sup>

右にも引用したように、「役者は一生の修業」であり「芸を磨くためには日常不断の稽古」が必要であるが、弓術と同様、「日常の稽古事」が「一層大切である」こと、弓術の矢を放つ修業と「役者が揚幕」から一步踏み出したら、もう誤魔化しはきかないのは同様であること、「日常不断の心掛け」が大事であること、弓術においては、矢を的に当てようとばかり考えてはいけませんが、これは役者も同じで「賞められやう、受けさせやう」とあせってはならず、しつかりとした稽古を積んで「それだけの心構え」をつくる必要があること、といった内容を述べている。まさしく芸談のひとつといえよう。

さらに、昭和一八年（一九四三）四月号には、六代目尾上菊五郎が「名人談義」欄で「鐘の音の中にかくれたる（談）」という随筆を寄せている。この随筆は「談」とあることから、おそらく、六代目尾上菊五郎に取材したうえで、記者がまとめたものである。

内容は、六代目菊五郎が私淑した曹洞宗大本山永平寺貫主森田悟由師の教えや、禪の境地と役柄になり切るときの心情の關係に共鳴したことを述べ、そのうえで、昭和一年（一九三六）三月、歌舞伎座で踊った『京鹿子娘道成寺』の鐘入りの際の心境が禪の境地であったこと、これからも森田禪師の教えと「鐘の音のなかにかくれる」境地を極めるために修業していく、と述べている。

このように、宗門系雑誌のうち一誌のみだが、歌舞伎役者が聞き書きなどをされて随筆を寄せていることを紹介した。その内容が芸談や

芸論であることは注目に値するものであり、その役者や芸を知るうえでの一助ともなるのではないかと考える。<sup>(3)</sup>

近年、近代演劇研究における潮流のひとつに、演劇雑誌類の考察があげられる。専門雑誌類の編集者や編集傾向に関する分析、たとえば『演芸画報』や『幕間』など、専門雑誌類の編集方針・傾向、主宰者・編集者、掲載の芸談・芸論などが考察され、これまでにない知見の発見が相次いでいる。<sup>(4)</sup>

このような研究動向を勘案すれば、前掲したような近代宗教教団や関連する団体が編集・発行した雑誌や機関紙などの刊行物に記載される「演劇」や「演芸」、ひいては芸能に関する記事を抽出し検討することも、近代演劇や演芸研究に貢献できるのではなからうか。

とはいえ、こうした宗門系雑誌や刊行物類は、当然のことながら演劇専門雑誌ではないため、その情報や情報量は断片的であり、体系的に位置づけることは困難である。ただ専門誌には記されていない、あるいは記載されないだろう史料的情報も存在するといえ、従来の見解を補える点もあるのではと思量する。

ところで、近代浄土宗には『浄土教報』『教学週報』『浄土週報』など、宗門における公論的機関紙が刊行されていた。これらの機関紙は、近代浄土宗の動向を知るうえで重要な記事が掲載されているが、ときに演劇・演芸関係記事も掲載されており、演劇専門雑誌などが伝ええないような内容も確認できる。

そこで本稿は、近代浄土宗の公論的機関紙『浄土教報』『教学週報』『浄土週報』に掲載された演劇・演芸関係記事を、資料紹介を兼

ねつつ、その内容を考察していききたい。とくに今回は、慈善事業と演劇関係記事を軸に検討していくこととする。<sup>(5)</sup> というのも、近代浄土宗は戦前の一時期、「社会事業宗」と称されるほど、社会事業に力を入れ、社会に貢献した宗派であった。そのため、さまざまな慈善事業・救済事業、社会事業が展開されたが、そういった事業が行われた際、演劇・演芸が「慈善公演」というかたちで実施されることが多かったからである。

## I 『浄土教報』と渡辺海旭

### 1 近代浄土宗と機関雑誌

具体的な考察に入るまえに、論の前提として、『浄土教報』『教学週報』『浄土週報』と、前者二紙に深く関わった渡辺海旭について確認しておきたい。

『浄土教報』は、明治三二年（一八八九）一月二五日に創刊された近代浄土宗の公論的機関紙である。発行元は浄土教報社で、浄土宗が近世的教団から近代教団へ脱皮するための牽引役を果たすと同時に、教学の近代化と教線の伸展にも寄与した。

創刊しばらくは、明治二〇年（一八九七）に復興した浄土宗内の向学者支援組織というべき「興学会」<sup>(6)</sup>の支援をうけ、同会の出版物の頒布、版權を得て出版活動にも進出していくなど、精力的な活動を展開したが、その後、資金援助は辞退し、公正・公明性を標榜し、紙面を充実させていく。<sup>(7)</sup>

当初、同紙は月二回の発行だったが、創刊四か月で「教令訓示及教本部（宗務庁）」の諸達示を公布するなどの宗門機関紙の機能を果たすなど、紙面の充実もあって、購読者が安定した。そのため、以後、週刊となる。

関東大震災後、主要な執筆陣が浄土宗の行学を牽引することを目指すため、浄土教報社を離れ、新たに東京教学週報社を設立、『教学週報』を創刊する。同紙面において、渡辺海旭らは社会事業を推進する理論と実践を提言、教学に対しては近代欧米の宗教学の理論をもって宗乗学を提唱したが、これらは教団改革への端緒を開き、他の宗団にも影響を及ぼしたのであった。<sup>(8)</sup>

執筆陣の核を失った『浄土教報』は次第に『教学週報』におされ、その活動も停滞していき、昭和一五年（一九四〇）一〇月、『教学週報』と合併、『浄土週報』と紙名が変更される。さらに時局への対応として、昭和一九年（一九四四）三月一日発行、通算二四七二号をもって終刊した。<sup>(9)</sup>

『浄土教報』『教学週報』『浄土週報』の掲載記事は、宗内外の公私の動向を報道したもので、多岐にわたる記事が掲載されているが、宗内の文化活動や演劇、演芸、芸能記事なども散見するのが特色であるのは、前述したとおりである。

### 2 『浄土教報』と主筆渡辺海旭

同紙主筆であったのが近代浄土宗の傑僧、渡辺海旭である。渡辺は仏教学や社会事業で多くの業績をあげた学僧で、明治五年（一八七

(二) 一月一日、東京は浅草に、渡辺啓蔵、トナの長男として生まれ、同一八年(一八八五)東京小石川の浄土宗源覚寺端山海定のもとで得度、同二年(一八九五)、浄土宗学本校を卒業した。同級生に望月信亨、荻原雲来などがある<sup>10)</sup>。渡辺海旭はそのまま、浄土宗第一校の教諭とともに、『浄土教報』の主筆となり、健筆をふるった。

同三年(一九〇〇)には、浄土宗第一期海外留学生として、ドイツのカイザー・ウイルヘルム二世大学(現在のシユトラスブルク大学 フランス領)へ留学、エルンスト・ロイマンらに師事し、梵・蔵・巴などの仏教各語を研究、仏教研究や宗教研究に従事した<sup>11)</sup>。

明治四三年(一九一〇)、一〇年にわたる留学から帰国すると、宗教学を設立するとともに、芝中学校校長に就き、死去までの二〇余年間校長を続け、芝中学の基礎をつくった<sup>12)</sup>。

また、渡辺は高楠順次郎を補佐するかたちで『大正新脩大蔵経』発刊にも関わり、その完成に尽力する。昭和七年(一九三二)、『大正新脩大蔵経』八五巻、『昭和法法宝総目録』二冊が完成すると、翌八年(一九三三)、敗血症で示寂した<sup>13)</sup>。

以上のように、渡辺は近代浄土宗を考えるうえで看過できない学僧であり、日本近代の社会事業としても欠かすことのできない人物である。ちなみに、カルピスの命名は渡辺によるものであることを付言しておきたい。

## II 『浄土教報』にみえる慈善公演

### 1 近代歌舞伎役者の慈善活動と福田会

『浄土教報』掲載記事のなかで、歌舞伎役者と慈善活動に関するもっとも早い記事は、明治二五年(一八九三)一月二五日号に掲載された、つぎの記事である。

#### 【史料2】

●俳優の寄附 去四日より九日まで囃殻街友楽館に於て升蔵團七等團十郎弟子数名ハ慈善演劇を興行し其収入金ハ福田会育兒院へ寄附せり殊勝の事と云ふべし

九代目市川團十郎門下の四代目市川升蔵や市川團七ら数名が、同日四日から五日間、日本橋囃殻町の友楽館において「慈善演劇」公演を行い、その収益を福田会育兒院に寄附したと伝えている。

升蔵らが公演収益を寄附した福田会(ふくでんかい)育兒院とは、明治九年(一八七六)三月、臨濟寺住職の今川貞山らによって、貧困にあえぐ児童を救済するという目的で結成が発議され、同一二年(一八七九)、臨濟宗、日蓮宗、天台宗、真言宗、時宗、浄土宗などの仏教諸宗派が協同して設立した、貧困家庭児童救済のための社会福祉施設のこと、キリスト教者石井十次によって設立された岡山孤兒院と並び称される存在である<sup>14)</sup>。

名称の(福田会)は、慈悲心をもって貧困者・孤独者・病人などに



布施をすれば幸福がもたらされる、という仏教の（福田思想）に由来する。

福田会育児院に対しては、歌舞伎座も社会事業の一環として関わっていた。『浄土教報』同二五年二月一五日号に、

【史料3】

●歌舞伎座の法話 本月二日より四日迄木挽町の同座に於て福田会 恵愛部長毛利公爵夫人を始め其他同部貴婦人三十余名の配慮にて 福田会副会長神谷大周師の名義にて同座に關係ある福地源一郎氏を始め其他の人々に協議せられ慈善演劇の興行あり狂言の前六十余名の孤児を列席せしめ神谷師一席の法話を勤められ福地源一郎氏も開場の趣意を述べたり三日間興行中の諸入費を差引残額ハ一切新築費の中に寄附せらるゝ事となり頗る盛大なりし由但し森田思軒居士は或る新聞に於て法話中弁士が体裁を得ざりし旨を批評せられし由なれとも鎖細の事尤むるに足らざるなり

とあるように、院舎新築の費用を募るため、福田会側と福地源一郎らが協議し、同月二日から三日間、歌舞伎座は福田会育児院の児童六〇名を招待したうえで慈善公演を行い、興行の諸費を差し引いた残額を同会に寄附したと伝えている。

三日間、午前一〇時開始の慈善興行の演目は、つぎのとおりである。

『新版歌祭文』野崎村

『名大島誉強弓』（嵐の為朝）一幕

『仮名手本忠臣蔵』進物・松の間・蜂の巣・赤垣三幕

浄瑠璃『冬至祭土農工商』常磐津連中

主な配役は、九代目市川團十郎が源八郎為朝・寺岡平右衛門を、五代目尾上菊五郎は高師直・赤垣源蔵、娘お光に三代目坂東秀調、四代目村福助（成駒屋）は妻彫江・塩山妻おさみで、本興行中、新橋・柳橋・赤坂の芸妓連が慈善販売に関わっている。<sup>(16)</sup>

升蔵たちや歌舞伎座が同会へ慈善公演の収益を寄附した明治二五年は、同会にとって、受け入れ児童数増加のため、東京府の許可を得て、院内に私立福田会尋常小学校（本科、三年課程）を設立した年であり、一月には、麻布区筈町長谷寺境内に屋舎を竣工し、院児を連れて移転した年でもあった。

こういった事情からか、福田会育児院は同年中、院舎新築の費用を募るため慈善演芸会などを頻繁に開催しており、<sup>(17)</sup>升蔵らの慈善公演は、こういった公演の先駆けであり、歌舞伎座の慈善公演は集大成的なものであったであろう。

2 市村座の役者たちと東京養老院への寄附

『浄土教報』大正四年（一九一五）六月二五日号には、大正期、市村座で活躍した六代目尾上菊五郎、初代中村吉右衛門らが東京養老院に寄附をした記事が掲載されている。

【史料4】

◎青年俳優の同情 東京市村座座々附俳優尾上菊五郎、中村吉

右衛門丈一同は 先帝陛下の「あつしとも云はれざりけりにえかへる水田に立てる賤を思へば」の御製に恐縮し、一同申合して今後「暑い」と云はぬ規約を設け違反者は罰金として一回五銭を預金する事となし過日來之を施行しつゝ、ありしが数日以来の温気にて違反者続出し忽ち金拾円を得たり、さて之が費途に就て意見区々菓子か氷かと評議の挙句、山田に立てる賤にはあらねど寄辺渚の捨小舟、養老院に贈るこそ陛下の思召にも適ふめれと直ちに下谷の五九〇一番を呼び出し些少ながら金一封東京養老院老人中へ呈するものもと台詞混りの音羽家の口上にさすがの松濤神達氏もコハ難有し辱けなしと随喜の涙に墨の袖をぞ濡らしけるとなむ。けに麗しき一幕と云ふべし。

六代目菊五郎や初代吉右衛門らが、明治天皇の御製「あつしとも云はれざりけりにえかへる水田に立てる賤を思へば」に感動し、座中で「暑い」といわないように諮り、もしいえば一回五銭を徴収する、という企てをしたところ、「金拾円」となったので、みなで話し合つて東京養老院に寄附した、というのである。

彼らが寄附した東京養老院とは、養老救護会を母体とする高齢者福祉施設のこと、岩田民次郎による大阪養老院とともに、仏教系高齢者専門施設の草分け的存在である。

明治三七年（一九〇四）、養老救護会は東京養老院と改称したが、同四三年（一九一〇）二月、「全部類焼の上、理事の行動に非難を生じ廃滅の否運」<sup>18</sup>に見舞われた。同年六月、同院は内務省より六百円、

浄土宗から五〇円の寄附をうけ、それらをもとに再建に着手、趣旨書や寄附行為などの整備をすすめるなか、経営は浄土宗に移管された。大正二年（一九一三）、松濤神達師が同院の理事に就任、浄土宗から再建を託される。<sup>19</sup>

六代目菊五郎の「山田に立てる賤にあらねど寄辺渚の捨小舟」「些少なから金一封東京養老院老人中へ呈するもの也」といった台詞混じりの寄附を申し出したのに対し、「随喜の涙に墨の袖をぞ濡らし」た同院の理事、松濤神達師とは浄土宗の僧侶であり、同三七年、救貧救済事業として救護会を設立（翌年には仏教婦人救護会と改称）するなどした社会事業家でもあった。

大正二年一二月、同院は新築の講堂などへの移転準備をしたものの「佛像佛具の類不足」し、「市内有志家に慈善袋を配布し日用品廃物の類を集め」<sup>20</sup>るといったような状況にあり、その後も松濤師は財政難にあえぎながらも再建に尽力していた。そのようななかにあつての菊五郎らの寄附であったのである。松濤師が「随喜の涙に墨の袖をぞ濡らし」たといった表現もあながち誇張ではないといえよう。

六代目菊五郎や初代吉右衛門ら、市村座の役者たちによる寄附「金拾円」だが、現在の貨幣価値に換算するのは当時の貨幣価値や業種の相違によって、また比較対照によって、安易には換算しにくいのはいうまでもないものの、参考までに記しておきたい。

大正二年（一九一三）の企業物価指数は〇・六四七、令和元年（二〇一九）の六九八・八と比較すると、一〇八〇倍差がある。つまり、一元は一〇八〇円に相当する。大正七年（一九一八）の公務員総合職

初任給が七〇円、平成三〇年（二〇一八）段階では一八一・二〇〇円に相当する。若干、前後するが、大正一〇年（一九二一）の物価を一、二確認すると、米一升（二等米）六〇銭、散髪四〇銭、大学授業料（実習費など除く）一〇〇円であった。当時の物価指数や物価価値などと照合換算すると、金一〇円は現在の一三万円弱といえようか。<sup>(21)</sup>

六代目菊五郎ら市村座の役者たちの企ては、社会事業として明確な意思があったというよりも、座中の（お遊び）といったものから発生した寄附であった。しかし、当時の貨幣感覚・物価感覚からして、慢性的に財政難であった東京養老院としては経営の一助となったのではなからうか。

### Ⅲ 近代演劇・演芸と慈善公演

#### 1 東京興仁会と新派慈善公演

東京興仁会は大正元年（一九一三）一月、東京佛教慈善会支部設立の趣旨にもとづき、東京府下の浄土宗寺院の有志者などによって「出獄人を保護し正業に就かしめ長く良民の生活を持続」させるために組織された更生保護団体である。<sup>(22)</sup> 史料上、「免囚保護事業東京興仁会」、<sup>(23)</sup> 出獄人保護興仁会、「免囚保護興仁会」<sup>(24)</sup>とも記される。

設立当初は、会長に増上寺法主堀尾貫務上人、顧問は内務省地方局長水野鍊太郎ほか五名、成田長英師、雄谷俊良師が常務理事、理事として、芝・江東・浅草ほか五教務所、増上寺法教科長、雄谷共済会理事が就き、九教区組長四二名が評議員として選ばれている。のちに、

常務理事のひとりとなる雄谷俊良師は梅本龍海師に交代し、成田長英師とともに運営に尽力した。<sup>(26)</sup>

大正三年（一九一四）八月八日から五日間、同会の事業費を得んがため、神田三崎町にあった東京座において、佐藤歳三、藤澤浅二郎一座による「慈善演劇」興行の予定であることを、『浄土教報』はつぎのように伝えている。

#### 【史料5】

◎東京興仁会の慈善演劇 東京府下浄土宗寺院重職並に篤

志者を以て組織せられ出獄人を保護し正業に就かしめ長く良民の生活を持続せしむる目的を以て必要の事業を経営しつつある同会にては事業費を得んがため来る八日より十二日迄五日間毎夕六時より東京座に於て佐藤歳三、藤澤浅二郎一座の慈善演劇を興行する筈にて関係者は熱心奔走中なり。登場脚本は社会劇「男爵家」喜劇「見合ひ」なり。仁者の愛顧を希望す。<sup>(27)</sup>

「慈善演劇」公演が予定されている佐藤歳三は、明治二四年（一八九一）、兵庫県赤穂で角藤定憲一座の公演に代役で初舞台、そののち上京し、同二八年（一八九五）に伊井蓉峰、水野好美とともに伊佐水演劇を組織して活躍した新派役者である。

『金色夜叉』の荒尾、『不如帰』の片岡中将などを当たり役としたが、晩年の消息は不明で、没年もはっきりしていない。したがって、この公演は彼の晩年の出演履歴につながるものといえ、その意味で注



目できょう。

佐藤が共演した藤澤浅二郎も新派俳優であり劇作者で、同二四年（一八九二）二月、川上音二郎が堺の卯之日座<sup>(28)</sup>で書生芝居を結成しており、俳優兼作者として参加した。以後、川上一座で活躍、『板垣君遭難実記』『壮絶快絶日清戦争』などの脚本を執筆している。

同三四年（一九〇二）、川上一座の渡欧公演に加わり、帰国後、『オセロ』の勝芳雄、『ハムレット』の葉村年丸などを演じ、新派全盛期の明治三〇年代後半は高田実一座に加わり、『金色夜叉』の間貫一などを当り芸としている。

同四一年（一九〇八）九月、藤澤は、新時代の俳優の養成を目的に私財を投じ、独力で東京牛込に東京俳優養成所を設立、同養成所は同四三年（一九一〇）に東京俳優学校と改称、自身が校長に就任したが、翌年（一九〇九）、経営難から閉鎖した。

藤澤は大正六年（一九一七）三月三日、五二歳で没したが、東京俳優学校閉校以降は不遇であったといえ、そういうなかでの公演参加であったといえる。

東京興仁会は浄土宗系の更生保護事業として活動していたが、成田梅本両師による個人経営的側面が強く、財政難に陥っていた。その改善のため、同会を後援する後援会「興仁会後援会」が昭和一七年（一九四二）に設立された。同会も、

#### 【史料6】

興仁会後援会

慈善興行で募金募集

梅本龍海氏が献身してゐる免囚保護興仁会は個人経営として非常な経営難にも拘らず、同氏の血みどろの活躍で宗門に於ける斯業方面に巨歩を印してゐるが、今度同氏を知る東京有志によつて後援会が生れ、その第一着手として来月五、六両日新橋演舞場五郎劇を観劇してこの慈善興行による利益を同会基金に寄付すること、なつた。東京寺院各位の任侠的援助を切望してゐる。因に梅本氏は司法省より筒拔せられ、斯業代表全国九名中に加はり、十一日東京発鮮清の思想保護情況観察に赴いた。<sup>(29)</sup>

といったように、興仁会の運営費捻出のため、一〇月五日、六日の二日間、新橋演舞場において、曾我廼家五郎一座による慈善公演を予定し、その利益を興仁会に寄附することを伝えている。

つぎに、出所者保護事業と関連して、釈放者保護事業と慈善公演を垣間見てみたい。『浄土教報』昭和二年（一九二七）九月一六日号に、

#### 【史料7】

釈放者保護事業に

浪曲家奮起す

浪界の大斗吉田奈良丸氏が釈放者保護事業の急務なるを痛感し自らその第一線に立たんことを発願したので東京釈放者保護事業連盟と財団法人輔仁会とが各々主催後援の形ちて九月十三日より三日間午後五時から明治神宮の青山会館で開催された。

とあり、浪曲師二代目吉田奈良丸が社会事業の一環である釈放者保護事業を重要視し、自ら「第一線に立たん」と、東京釈放者保護事業連盟主催、財団法人輔仁会<sup>30</sup>後援のかたちで、青山会館において慈善公演を開催したと伝えている。

二代目奈良丸はのちの吉田大和之丞で、桃中軒雲右衛門、初代京山小円と人気を三分した浪曲師である。義士伝物を得意とし、明治四三年（一九一〇）発売のレコード『赤穂義士伝』は売り上げ枚数二〇万枚を誇るなど、当代随一の人気浪曲師であった。

一寄席経営などにも長けた二代目であったが、釈放者保護事業といった社会事業に関心をもち関わっていたのは注目できよう。

## 2 近代浄土宗のハワイ開教と慈善公演

近代浄土宗が制度的に海外布教を開始したのは明治三一年（一八九八）のことである。同年四月に開教制度が定められ、八月発布の教令で内容が具体化し、まず四開教区を設置、最終的には七開教区となった。昭和二〇年（一九四五）八月の敗戦以降、台湾・朝鮮・樺太・満州・中華民国・南洋の各開教区は閉鎖となり、現在はハワイ・北米・南米の三開教区となっている。<sup>32</sup>

ハワイ開教区は明治三一年（一八九八）の開教制度設立以前より海外布教がなされた地域であった。同二六年（一八九三）あたりから、浄土宗内では海外布教に関する議論がなされ、『浄土教報』にも海外布教についての論説や他宗派の海外布教に関する記事が散見するようになる。

同二七年（一八九四）、白石堯海師、道重信教師その他有志によって、ハワイ開教の母体となる「布哇宣教会」が組織されると、同年三月二五日には松尾諦定師が「布哇宣教会布教師」として来布。同じく同年五月には、岡部学応師がハワイ島ハマクア地方で布教をはじめている。<sup>33</sup>

このように、初期ハワイ開教は布哇宣教会・ハワイ宣教師費募集事務所などが後援し、松尾師らの尽力により展開、同三一年に浄土宗開教区制度が制定されたことで、ハワイ開教は一宗の事業となり、第四開教区として位置付けられることとなった。<sup>34</sup>

ところで、『浄土教報』大正五年二月八日号に、

### 【史料8】

布哇ワイクル教会堂の慈善興行 矢島春道氏の主任せるワイクル教会堂新築負債償却の目的を以て去月六日七日両日京山春駒一行の慈善浪花節を興行したるに仲々の盛況にて二百数十弗の剰余金ありたりと云ふ

と、浪曲師京山春駒による慈善公演の記事が掲載されている。

ワイクル教会堂はマウイ島セントラルアベニュー沿い、カフルイ・ビーチ近くにある浄土宗寺院のことで、明治四五年（一九一〇）、ブウネネ教会堂の原聖道師がワイクルに仮布教場を設け布教を始め、大正五年（一九一六）、太田秀山師が教会堂を新築、内山信孝師を迎えたことから、同氏を初代としている。<sup>35</sup>

京山春駒を迎えた浪曲慈善興行は、同寺院の教会堂などの改築費負債償却目的であることは記事からもわかるが、ワイナク教会堂は、明治四二年（一九〇九）に教会堂と小学校を改築、大正二年（一九一三）に隣接地を買収して教会堂や小学校を移転改築、同六年（一九一七）には二階建ての庫裡を新築するなどしている。したがって、慈善公演は、こういった施設整備事業の一環として行われたと考えられる。

招聘された京山春駒は明治一〇年（一八七七）一二月、香川県善通寺に生まれ、幼少より浪花節を好み、一九歳のおり、京山齊一に弟子入りして京山駒吉を名乗り、二二歳で春駒と改名。その後、日露戦争に従軍した経験を生かし、「実戦談」を読み好評を博した。このことは十八番のひとつが『旅順』であったことからうかがえよう。

春駒は大正二年一二月、廣澤館主主催による「実力競芸奨励」会<sup>(36)</sup>で一等に選ばれており、当代の実力派であった。

京山春駒がどのような経緯で渡米し慈善公演に招聘されたか、詳細は不明だが、『渡米美談』といったSPレコードが残されていることから、海外での興行などに積極的であったことがうかがえる。<sup>(37)</sup>

## おわりに

以上、資料紹介も兼ねつつ、『浄土教報』『教学週報』『浄土週報』掲載の演劇・芸能記事のうち、社会事業や慈善事業にともなう「慈善公演」関係記事の一部を抽出し検討を加えた。

近代浄土宗の場合、「社会事業宗」と呼ばれるほど、さまざまな社

会事業が展開されているが、運営資金や施設費などで苦慮することも多く、そのような場合、「慈善公演」というかたちで演劇や演芸が公演されている。<sup>(38)</sup> その一端を『浄土教報』などから考察したが、近代演劇・演芸と慈善公演との相関性は看過できないものといえるのではないか。

また、四代目市川升蔵らや歌舞伎座が福田会育児院への慈善公演に関わる、六代目尾上菊五郎や初代中村吉右衛門をはじめとする、市村座の役者たちによる高齢者養護施設への寄附などについて言及したが、当時の劇壇の一端を知るうえで注目できよう。

検討した『浄土教報』などにおける「演劇」や「演芸」に関する記事は断片的であるが、専門雑誌には記載されないような動向や内容もあり、研究の一助になることは確かであろう。

今後は演劇専門雑誌が伝える記事内容と比較するなどの検討も必要であろうし、慈善公演に関しても関連する史料と照合することにより、より詳細に検討できるといえるが、これらは今後の課題としたい。

## 〔注〕

- (1) 法然上人鑽仰会ホームページ [jodo-san-gokai.org](http://jodo-san-gokai.org)。  
法然上人鑽仰会は、昭和一〇年（一九三五）、真野正順、中村弁康、佐藤賢順、佐藤密雄、佐藤良智ら、浄土宗僧侶の有志が浄土宗の行く末を憂い設立した任意団体である。活動拠点は大本山増上寺天光院で、月刊誌『浄土』の発行を主な活動とした。『浄土』は昭和一〇年五月一日に創刊号を発売、現在、九六一号を数える。  
(2) 初代中村吉右衛門の芸談としては「秀山弓譚」（川尻清譚編『名優芸談』中央公論社、一九三六年）や『吉右衛門自伝』（啓明社、一

九五一年）があるが、とくに前者の内容は本文中に引用した「修行第一」と重なる部分が確かめられる。「秀山弓譚」は聞き書きであるが、『浄土』に掲載された「修行第一」も、おそらく、記者が聞き書きしたものを記事化したものであろう。

(3) このほか、昭和十二年（一九三七年）六月号には、七代目松本幸四郎が「名人談義 瀬川菊之丞の話」と題する随筆、内容は芸論を寄せている。

(4) 児玉竜一氏の一連の研究や歌舞伎学会編『歌舞伎―研究と批評』四五号「歌舞伎雑誌の戦後」に収載されている各論考を参照されたい。慈善事業とは、もともと、慈善の理念に基づく組織的活動をさすもので、慈善とは元来は仏教用語であり、慈悲の実践を意味する。この慈は真実の友情であって、悲は優しさ、とされる。慈悲の実践は、他人を自己のうちに転回せしめること、対象において自己を生かすことであるとされた。

近代日本における慈善事業は、明治初期、カトリック系の奥浦慈恵院・プロテスタント系の岡山孤児院・仏教系の福田会育児院などの宗教的背景の強い育児施設が設立されていたことからほぼまっていが、イギリスやアメリカのそれとは異なる動向をたどる。

産業革命期のイギリス・アメリカでは、都市社会下層の貧困問題に対する社会的対応として慈善事業が位置付けられた。その思想的基礎づけは、中世のキリスト教的慈善が一八世紀の啓蒙思想が主張した「博愛」の理念によって強化され、慈善事業のちに近代社会事業に発展していった。しかし、日本近代はそのような歴史的展開・思想的背景がないため、感化救済事業を経て近代社会事業へと発展する経路をたどっている。

日本においても社会問題の発生とともに数多くの慈善施設・団体が設立されていくが、これらは中央慈善協会や国庫奨励金・助成金の交付などによって行政的な規制を受けつつ、やがて、大正デモクラシーのもとで民間社会事業と呼ばれるものに移行していった。

(6) 『浄土教報』明治二十六年（一九〇三年）二月二十五日号など参照。

(7) 『浄土教報』明治二十二年（一八九九年）一月二十五日号及び新修浄土宗大事典および佛教大学附属図書館ホームページ参照。

(8) 同右。

(9) 同右。

(10) 新修浄土宗大事典及び西村実則『新版 萩原雲来と渡辺海旭 ドイツ・インド学と近代日本』（大法輪閣、二〇一九年）一二頁。なお、渡辺海旭に関する主な研究として、芹沢博通『渡辺海旭研究』（大東出版社、一九七八年）、同『シリーズ福祉に生きる 渡辺海旭』（大空社、一九九八年）、吉田久一『日本近代仏教社会史研究』（吉川弘文館、一九八四年）などをあげておきたい。

(11) 同右及び拙稿「学僧 稲垣眞我とイギリス留学」（佛教大学歴史学部『歴史学部論叢』一〇号、二〇二〇年）参照。

(12) 同右。

(13) 同右。

(14) 福田会育児院については、福田会育児院編『社団法人 福田会育児院概要』（福田会育児院、一九一四年）、吉田久一『日本近代仏教社会史研究』吉川弘文館、一九六四年、宇都榮子「福田会育児院創立の経緯と解説当初の組織」（『東京社会福祉研究』第三号、二〇〇九年）、同「福田会育児院創設とその後の運営を支えた組織」（『社会福祉』第五三三号、二〇一四年）、同「福田会育児院史研究」（『育友』一五〇号、二〇一七年）、滝口桂子「明治期における福田会育児院の研究」（『社会福祉実践史の総合的分析』、一九八九年）、濱田由美「福田会育児院創設に関する一考察」（『綜合仏教研究所年報』四三三号、二〇二二年）などの諸研究をあげておきたい。

(15) 永山武臣監修 金森和子編『歌舞伎座百年史』資料編（松竹株式会社、一九九五年）二二二頁。

(16) 同右。

(17) 前掲注14及宇都榮子「福田会育児院創設とその後の運営を支えた組織―創設を支えた人々・下賜金・皇族名譽総裁―恵愛部の分析から―」（『社会福祉』第五五号、二〇一四年）。

なお、同論考所収「福田会の沿革」によれば、「明治一二年（一八七九）八月、新富座の森田勘弥・市川團十郎・尾上菊五郎・市川左団次・岩井半四郎・中村仲蔵・中村宗十郎と三遊亭円朝の八人で浅草の観音、黒沢不動に福田会育児院施入錢箱を奉納」したとあり、歌舞伎役者と福田会との関係は慈善公演以外でもあり、注目できよう。

- (18) 『浄土教報』明治四三年（一九一〇）六月二十七日号。  
(19) 新修浄土宗大事典及び大橋俊雄『浄土宗人名事典』（斎々坊、二〇〇一年）参照。  
(20) 『浄土教報』大正二年二月一日号。  
(21) 国立国会図書館のリサーチナビ「過去の貨幣価値の調べ方」、『値段史年表 明治・大正・昭和』（朝日新聞社、一九八五年）などを参照した。  
(22) 『浄土教報』大正元年（一九二二）一月一日号。  
(23) 『浄土教報』大正五年（一九二六）五月一〇日号。  
(24) 『浄土教報』大正七年（一九二八）正月二十五日号。  
(25) 『浄土週報』昭和一七年（一九四二）九月一三日号。  
(26) 『浄土教報』大正元年一月一日号、同大正五年九月八号、『浄土週報』昭和一七年九月一三日号など。  
(27) 『浄土教報』大正三年（一九一四）八月七日号。  
(28) 新地龍神町にあった「龍神座」が明治初頭に宿院に移転、「大山座」となり、明治一八年（一八八五）「卯之日座」と改称、アジア・太平洋戦争末期の建物疎開で壊されるまで、近代堺を代表する芝居小屋であった。
- 『堺大鑑』第四卷二二〇～二二二頁には、明治三五年頃の卯之日座の写真が掲載されている。なお、拙著『近世上方歌舞伎と堺』（思文閣出版、二〇一二年）も参照のこと。
- (29) 『浄土週報』昭和一七年九月一三日号。  
(30) 輔仁会は大正一三年（一九二四）、三井八郎二郎の寄附によってできた司法保護事業の統率機関で、更生保護法人日本保護協会の前身

にあたり、同年以降は少年保護微罪不起訴処分者の保護・仮釈放者保護など、すべての司法保護事業の達成を期した。

- (31) 倉田喜弘『日本レコード文化史』（東京書籍、一九九二年）六五頁。  
(32) 浄土宗海外開教のあゆみ編纂委員会編『浄土宗海外開教のあゆみ』（浄土宗開教振興協会、一九九〇年）二〇～二二頁。  
(33) 同右。  
(34) 同右、四六～四七頁。  
(35) 同右、二二七～二二九頁。  
(36) 全国浪花節奨励会編『浪花節名鑑 増補』（杉岡惣吉、大正一三年）国立国会図書館蔵、四四頁。  
(37) 京山春駒に関して、SPレコード盤『渡米美談』（金鳥レコード）が国際日本文化研究センターの「浪曲SPレコードデジタルアーカイブ」に収蔵されている。内容は今回の慈善公演とは関係しないが、浪曲師としての春駒を考えるうえで示唆するものといえよう。  
(38) 『浄土教報』にみられる慈善興行の記事に関して、本文中でとりあげなかったものを、一、二あげておきたい。

#### 【史料9】

鐘樓堂寄附興行 回向院鐘樓堂寄附興行天勝一座は去る十五日より五日間国技館に於て大奇術を開演せり、連夜観客多数にて上景気なりき、回向院側よりは織田執事以下出張し、諸種尽力する所ありき。（『浄土教報』大正五年（一九一六）三月二四日号）

#### 【史料10】

●佛教平和倶楽部の慈善活動

— 慈光学園創設援助の爲め —

大乘仏教の精神に基いて社会の平和的解決を得る爲め、宗大出身並に学生中の有志によつて過般佛教平和倶楽部なるものが組織され、種々の實際運動の計画を立て、ゐるが、直接事業と



しては既設団体の援助、仏教的平和思想の宣伝をなすと共に、工場商店を経営し或は事業に投資し、諸種の興行等をなしてその利益を事業費に当てる事業費に当てる事としてゐる。先づその第一着手の運動として南千住慈光学園創設の援助を目的として、三月二、三日両日有楽座で、同部主催となり、「人と藝術社」「東京布教團」「やまと新聞」等の後援を得て慈善演劇を催す事なつた。番組は

第一、管弦楽セビラ（スパニッシュ・ワルツ） 利教大学音楽部

第二、津村京村作「その夜」一幕

第三、中音独唱

第四、高倉輝作「孔雀城」一幕

出演者は人と藝術社員で各大学等も大に声援を与へて居り、「孔雀城」の如きは阿育王に関する物語として非常な期待を以て迎へられてゐる目下松岡、中村宗大生等極力奔走中である。（『浄土教報』大正十一年（一九二二）二月十七日号）

【史料11】

◎静岡市社会事業の忠臣となつたことも相談所

——宝塚少女歌劇団の復按振り

静岡市報土寺戸崎潜龍氏の努力で益々その成果を挙げてゐる静岡ことも相談所は、児童相談、保育、低格児童収養等をなし、その着実な事業振りはよく一般の識認する処となり現在では同市社会事業の忠臣をなしてゐる有様で、県社会課の援助は勿論、尾崎代議士を会長とする後援会も出来、その前途洋々たるものがある。大阪宝塚少女歌劇団は東上の帰路、特に同所後援の演劇会を同市劇場で十一月四、五日開催し、両日共満員の盛況を得、純益金も貳千余円に及んだ。

尚四日は同所附属の少年会を中心に児童研究会を開き、平素の会そのまゝ、を研究的集会とし、午後は引き続き県社会課主任

並に宗務所社会課鈴木積善両氏の児童救養に関する談話があり、薄暮まで熱心に意見を交換した。（『浄土教報』大正十一年（一九二二）十一月一七日号）

【史料12】

◎大阪浄宗奨学会で

宝塚歌劇公演

——上宮中学増築資金募集の為に  
大坂寺院の積極的活動——

大阪市内浄土宗寺院の有志重職によつて組織され、社会事業や教育事業に盡瘁しつゝ、ある大阪浄土宗奨学会では、上宮中学校の校舎増築に際し関係寺院住職疑議の結果、一方、新しく上宮中学校々社増改築後援会を發起して檀信徒の慶議にその達成を希ひ、他面宝塚歌劇月組大阪公演を主催し、観劇会より生じる純益全部を建築資金中に寄附する事となつた公演は十月三、四、五の三日間毎夕六時から大阪市中之島公会堂で開演、切符は三円二円一円の三種であるが、大阪寺院は挙つて之を応援し、又上宮中学校々舎増築の為めあらゆる方法を講じて積極的公演運動を続けつゝ、あることは本宗教育事業に対する美学にして喜ぶべきことである。（『教学週報』昭和三年（一九二八）九月三〇日号）

【史料13】

鎌倉今泉山静養所

後援慈善興行

神奈川県鎌倉郡小坂村称名寺成實随翁氏の経営なる今泉山静養所では今泉山鎌倉第一参拝講の主催で後援慈善興行名人第演奏会を開いた。会場は鎌倉町の鎌倉常設館で、八月七日八日の両日昼夜二回に亘つて行はれて盛会であつた。

尚プログラムは七日 落語、野ざらし音曲名優声音、三遊亭圓遊

琵琶、橋大隊長、榎本芝水 義太夫、半七酒屋の段、竹本越駒 講談、義士銘々伝(長講) 桃川如燕 義太夫、寺小屋手習伝授、竹本越駒 八日 落語、紙屑屋音曲名優声音、三遊亭圓遊 琵琶、義士打入、榎本芝水 義太夫、太閤記十段目、竹本越駒 講談、昭和天覧試合(長講) 桃川如燕 義太夫、安房の鳴門順礼歌、竹本越駒 又、二十日午後七時から本堂で「講演と音楽の集ひ」を行ひ、成實山主の講演「自己を知れ」の後、左の如き演奏が成實一雄氏司会のもと行はれた。

第一部 一、四重奏「ウキズアイアンハンド」(行進曲) 二、二重奏「鞭と拍車」(ギャロップ) 三、独奏「収穫の踊り」(舞曲) 四、四重奏「リベラの舟」 五、童謡「一、くるみ 二、おとなり三軒」 六、四重奏「フアランドーレ」(アル、の女より) 第二部 一、四重奏「とかげトかへる」(描写曲) 二、二重奏「夏のひり」 三、独奏「夢のお城」(接続曲) 四、二重奏「磯節」(和曲) 五、四重奏「アルセーニンの美女」(舞曲) 第三部 ジャズ 1、ラモナ 2、モンパ 3、バルセ□ラ 又出演者は  
クレスツェンタ、ハーモニカ、クバルテートで清水武夫、藤田敏彦、中島勝治、古部重義等であつた。(『浄土教報』昭和四年(一九二九)九月一日号)

#### 【史料14】

##### ◎社会事業資金寄附慈善公演

##### 教化劇の夕べ

吉水得栄氏主宰教化劇協会主催、大本山増上寺後援の教化劇の夕べが去七八両日午後六時より芝区公会堂にて上演されたが、会員権の純益は全部社会事業資金として寄附することとなつた。上演目は法然上人御行蹟の一部として「黎明への一路」一幕「二見ヶ浦の大法然」二幕其他二種。(『浄土週報』昭和五年(一九三〇)九月二一日号)

